

リーフデ号漂流実験

平成二年四月十一日

さとうたくみ



(指夫港出港)

一六〇〇年四月十九日（慶長五年三月十六日）、アダムス一行を乗せたオランダ船リーフデ号は、北緯三十二度三十分に至って、ようやく日本の陸影を発見した。後にアダムスが綴った妻宛の手紙には、「豊後に近き一地を認めたり。」と書いてある。

四月十一日（旧暦三月十六日）十一時二十分、我々を乗せた実験船（第一長久丸四、四六ト）は延岡の鯛名港を後にして、北緯三十二度三十分の線上に沿って東に向かっていた。

天気予報によれば低気圧の前線が近づいており、日向灘には強風波浪注意報が出されている。実験中止も止むを得ないと思っていたので、ここまで来ただけでも幸いであった。空は低く雨雲が垂れ込めており、陸地はモヤっている。したがって予想よりも近い距離で陸地が見

えなくなるだろう。

私の予測では、土々呂沖五〇^キの地点まで進めば日向の陸影は消えて、最短距離の蒲江深島方面の陸影のみが視界に残る筈であった。そこがアダムスの初めて見た日本の陸影「豊後の一地」を発見した地点だと言える。

しかし、沖に出るに従ってうねりが高くなり、白波が立ち始めた。船長は「この辺が限度だ」と判断し、エンジンを停止した。遠見山の御崎から十六^キ、日向の陸影は未だはつきりしており、深島は北にぼんやりと見えている。目標地点からは遥かに陸寄りであるが、止むを得ない。

十二時漂流開始、位置は北緯三二度二九分四〇秒、東經一三一度五四分一二秒。南東の風三^級、波高一・五^級。この時、漂流ビン十本を投げ込んだ。うち五本は一・五^級の深さに錘がつけてあり潮流の抵抗を受ける。錘のついていないビンは主に風の影響が大きく、投げ込んだ途端、両者別々の方向に隊列を組んで流れて行った。船は船尾の三角帆だけで進行方向に船尾を向けている。途中船首に帆がわりのシートを張り、船首を進行方向に向ける。



十三時、北緯三二度三〇分四六秒、東經一三一度五二分三十秒。南東の風四^級、波高一・五^級、進行速度〇・八^{ノット}・九^{ノット}。船首は北の深島に向いているが、帆は南東の風をはらんで進行方向は北西の島野浦に向かっている。先程まで見えなかった蒲江の芹崎が見えてきたので、今日の視界は三五^{ノット}と推定できる。次第に風が強まり白波が多くなる。波高二^級、船の進行速度は一・〇^{ノット}・一・三^{ノット}。

十四時の位置、北

緯三二度三一分四六秒、東經一三一度五二分〇八秒。ここで船長の「実験中止」命令がでた。残念だが仕方がない。帆をたたみ、残りの漂流ビン十三本を投入して帰途についた。

船内でウトウトして気がつくと、もう



芹崎沖。空も海も暗く、海上は荒れ模様。船は左右に大きく傾きながら進んでいる。元防備隊の村上定男さん七二才は、亡き戦友に黙禱して海にビールを注いだ。船酔いを避けて船外にいた三人は、波飛沫を受けてズブ濡れ、顔を蒼白にして座り込んでいる。

時には天に突き上げられ、時には奈落の底に引き込まれるような恐怖は、鶴御崎がクライマックスだった。元ノ間海峡を越えると、嘘のように静かな佐伯湾が我々を向かえてくれた。実験中止には未練はあったが、船長の判断は正しかった。明るる日は風雨強く、一日中大荒れの天候であった。

(写真は鶴御崎)

実験の成果

わずか二時間の実験であったが、貴重な資料を得ることができた。漂流方向は北西ノ北北西、漂流速度は二時間に約五^キ、平均時速二・五^キであった。

それから二日後の十三日から漂流ビンの情報が入り始めた。錘付きのピンは、まっすぐ北上して蒲江の名護屋鼻周辺の定置網に引っかかり、あるものは湾内へ、あるものは湾外を更に北上している。錘の付いていないピンは発見が遅れ、今のところ一件だけ二十九日に島野浦で拾ったという情報が届いている。ほぼ風向きの方に流されている。

漂流実験の条件

岩生成一の訳した『慶応イギリス書翰』によれば、アダムスが日本の陸影を発見したのはユリウス暦の四月十九日である。妻宛の手紙に四月十一日と書いているのはアダムスの記憶違いで、セントマリア島から四ヶ月と二十二日を計算すると、十九日の方が正しいとしている。

ユリウス暦は紀元前からの古い暦で、太陽年を三六五・二五日としていたので、十六世紀までに春分の日は十

日ずれて三月十一日になっていた。ローマ教皇グレゴリウス十三世が改暦を断行して、春分の日が三月二十一日になるようにした。このグレゴリオ暦は一五八三年から実施されている。(平凡社世界百科事典参照)

したがってユリウス暦の四月十九日は、グレゴリオ暦の四月二十九日となり、日本の旧暦に換算すると慶長五年の三月十六日となる。

リーフデ号は「明くる日からうじて豊後に達した」が発見から漂着までの時間的経過についての記述はない。しかし、次のように仮定することができる。

陸影発見時刻	XATIVVAI漂着時刻	所要時間	船の速力 (行速約80km)
19日夕18:00時~20日朝6:00時=最長12:00時間	2.2km/h(1.2kt)	}	}
19日朝6:00時~20日夕18:00時=最長36:00時間	6.6km/h(3.6kt)		

北緯三十二度半から佐伯湾唐船バエまでの距離、約八十時を所要時間で割算すると、船は時速二・二~六・六時(一・二~三・六ノット)の速さで漂流したことになる。

潮流と風向

リーフデ号が陸影を発見した北緯三十二度半の地点は、既に黒潮の本流を越えて豊後水道域に差し掛かる地点である。もし黒潮に乗っていれば四国の沖を紀伊半島の方に流されていただろう。

また、豊後水道は干満の作用を受け、北流に乗っても次の南流に押戻される。したがって北上するためには、南風の吹いていることが不可欠な条件である。

しかし、三~四月は北風が最も多く強く吹く季節に当たり、「この時分は支那からもまたフィリピンからも船が来航する時季ではなかった」と『亜細亜誌』にも書かれている。

リーフデ号は決して楽な航海でこの地点に至ったわけではない。暴風雨に遭った二十八度から三十二度半まで、直線距離にして約五〇〇時を五十五日かかっている。平均すると一日に九時、時速四〇ノットのノロさである。諸々の悪条件が重なったにせよ、最大の原因は逆風にあったと考えられる。

四月の天候は変わりやすい、移動性の高気圧が次々に日本を通過するためであるが、南風が吹き込むのは高気圧が過ぎて次の低気圧の前線にかかるころである。リー

な航海に思いはせる

出航2時間後にリタイア

安全第一、荒天進路はばむ

徳川家の外交顧問になったイギリス人ウィリアム・アダムズ(三浦按針)を乗せたオランダ船「リーフ号」の漂着地は、大分県臼杵沖ではなく、佐伯沖だったのではないかと。この新説を裏証するための漂流実験が十一日正午、延岡市土々呂沖から開始。実験船には佐伯市の郷土史家、延岡のまちづくりグループのメンバーなど九人が乗り込んだ。しかし、低気圧の接近により海上がシケてきたため、実験は約二時間で中断された。

「これ以上、実験を続けるのは無理だ。たまたまに佐伯沖に向かいます。密航の船が漂り、船が小さく揺れ始めた。午後二時八分、実験船(4・46ト、全長10.5m)の船長・増水信昭さん(56)が、このように叫んだ。船を降ろす。エンジンがかかった。実験開始からわずか二時間後の中止決定。安否が第一」とする船長の判断だった。

乗船した九人は自然の厳しさを体験すると同時に、三浦が漂着したとされる臼杵沖の歴史をたどる。延岡市土々呂沖から臼杵沖まで約100キロ。二日後の夜、延岡市土々呂沖に到着した。船長は「この実験の目的は、定説ではルートガルの史実(「聖徳太子」にXIAIWA I(シヤイワ)と記述されていたことから、現在の臼杵市佐志生(あしひ)が、漂着地であるとされている。これに対し、佐伯市の佐伯史談会の井嶋さんが「佐伯市指天(ささか)沖の佐伯が漂着地という新説を提議

〔坂本記者〕

を止めて実験を開始した。乗船したのは佐伯側が班度(ばんど)の佐藤さん、昭和六十二年

「フデ号」の航路スタートで実験

と六十二年に佐伯―延岡間の「ロドリレー」を行った「日豊ロマン」の清松幸生さん(50)―佐伯市磯II。戦時中、海軍に所属していた村上貞嗣さん(50)―佐伯市下堅田IIも参加した。延岡からは、東北の文化支援グループ「吹えち会」の四山登世(とよの)さん(50)―榎葉(えんば)村の「フデ号」船長として、またマズミ関係は佐伯市の地元テレビ局カメラマン・平野憲(のり)さん、朝刊紙記者・楢原晃(あきら)さん、そして本紙記者が乗り込んだ。波は1―2m。曇り空。波は1―2m。船は左右に揺れる。風もなぐ。同じ地点に留まっていてるのに思えた。ヒロー島、

「これだけの普通ですが、低気圧が接近しているから波がえ」と増水船長が言う。そのころから船体が大きく揺れ始めた。右へ左へ大きく、眼下には黒くした海面。白いシキを頂上に乗せた波が、船を取り囲むように見える。船酔いを訴える乗船者が一人、二人……。船長で「こらしてしまおうも出てきた。」「くら実験は(はい)いい。判断が甘かったな。」「こう言う一人は船上でおお向けになっている。フライングをのぞき見たカメラマンの顔も驚かしている。用意したトラスチック製のビンを流すことにし。漂着地点を調べる実験のひとつ。風が入り、入れないの五個ずつを放流。する風が入り、入れないの五個ずつは、潮流に乗って南へ向かう。入れないの五個は、風に運ばれて北へ、中には運

「先に書いた紙をくれ、その漂着地点を教えてもらいたい」となっている。依然、船は大揺れ。午後一時をすぎたころから風が出てきた。波も高くなる。空が暗くなり、雨も降ってきた。午後北へ2.5m。漂流は実験中止を決めた。

船酔い者が1人、2人…

「こらで断念します」正直言って、ホッとした。

フデ号

過酷

九十年前、多くの犠牲者を
出しなが日本をめざしたワ
イルサム・アダムスたちの過
酷な航海に思いをはせた。
回説を裏証するため佐伯忠毅
会の佐藤さん(右)と建築家
山田が調査実験を計画した。
実験はアダムスの手紙の中
で「北緯度30分(書没不明)」、
イルサム・アダムスら百
九十人を乗せたランタ商船
「リープ」は、慶應三年
(1868年)にオランダを
出航。日本へ向かう途中、豊
明から12.5の沖合でエンシ

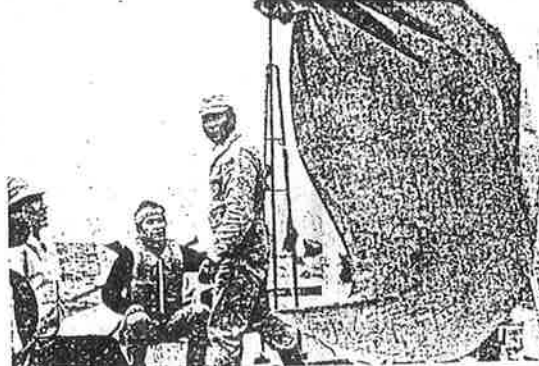
三浦按針は佐伯湾に漂着？ 新説に挑む歴史再現航海



土々呂沖で漂着実験のためピンを放流した

オランダ商船「リープ」 土々呂(延岡)

東海出がすすんで見える。ア
ダムスになったような感じにな
り、ぼんやり人影を見つめて
いた。「ぼんやりさんか、た甲
斐さんか」「マイツ」と書きま
めていた。
清松さん、佐藤さんが帆
を立てる。南東の風を受けて
船体の方向が変わった。「北
へ向かっぞ」と歌謡。
ゆくり動き始める。！



南東の風に帆がふくらんだ。針路は北へ！

船はほとんど初体験。船酔い
に心なすりかかっていたが、こ
の揺れは限界。「漁師の五
代目」と書きかかっていた甲
斐さん「マイツ」と書きま
めていた。
「残すが、ここで断念
します」清松さんが叫んだ。
船はエンシンをかけ、佐伯
湾をめざして走り始め。波
を乗り越え、波間を飛ぶよ
うに走る。
船酔いを避けよう、と船室
に入り船尾にいた目を空
めた三人は全身スベたけにな
りながら、船にしがみついて
いた。途中、大分県のお見崎
沖では、最近の波が船を揺そ
い、大層の海水が流れこむ
同時に船体はほぼ45度傾い
た。その瞬間一人の体が右
へ飛んだ。海へ飛び出され
けた危険な場面だった。

「再度トライする」と宣言

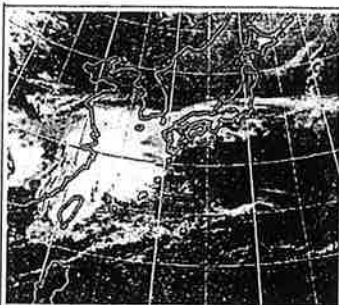
波静かな佐伯湾に入湾した
とき、全員がホッとしたのは
言うまでもない。
海の怖さを思い知らされる
体験だった。そして二百九十
年も前、透船も十分でない船
に乗り、一年間にわたる航海
して、最後には漂流というつ
らい事態になったアダムスら
「リープ」乗船風の苦悶
の一端をかり問いただす気
がした。
イルサム・アダムスに
はなれなかった今回の乗船員
たちは、「再度、実験航海にト
ライする」と宣言した。
男のロマンと危険は常に背
中合わせなのである。

フデ号も運良くこの風を捕えて一気に北上し、豊後に到達したのである。

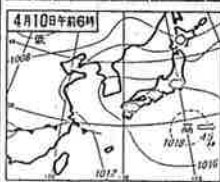
あすの天気

雲中層雨雲の風次第に強まり、濃霧状
 雲中層雨雲の風次第に強まり、濃霧状
 雲中層雨雲の風次第に強まり、濃霧状

この最低気温
 東京 4.0℃ 神奈川 3.0℃ 川崎 3.0℃ 横浜 3.0℃ 千葉 2.0℃ 埼玉 1.0℃ 東京 0.0℃
 大宮 0.0℃ 浦和 0.0℃ 蕨 0.0℃ 北浦和 0.0℃ 所沢 0.0℃ 西武池袋線 0.0℃



あすの天気統計
 晴 51% 曇 11% 雨 38%

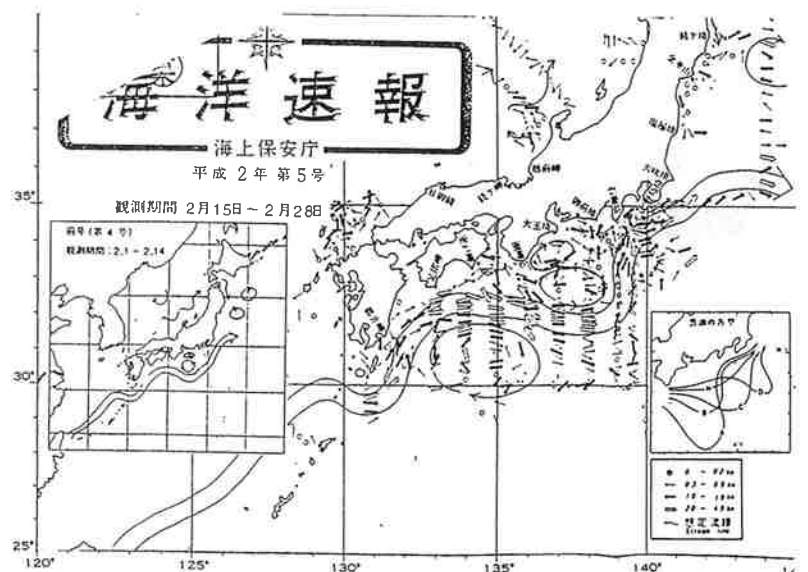


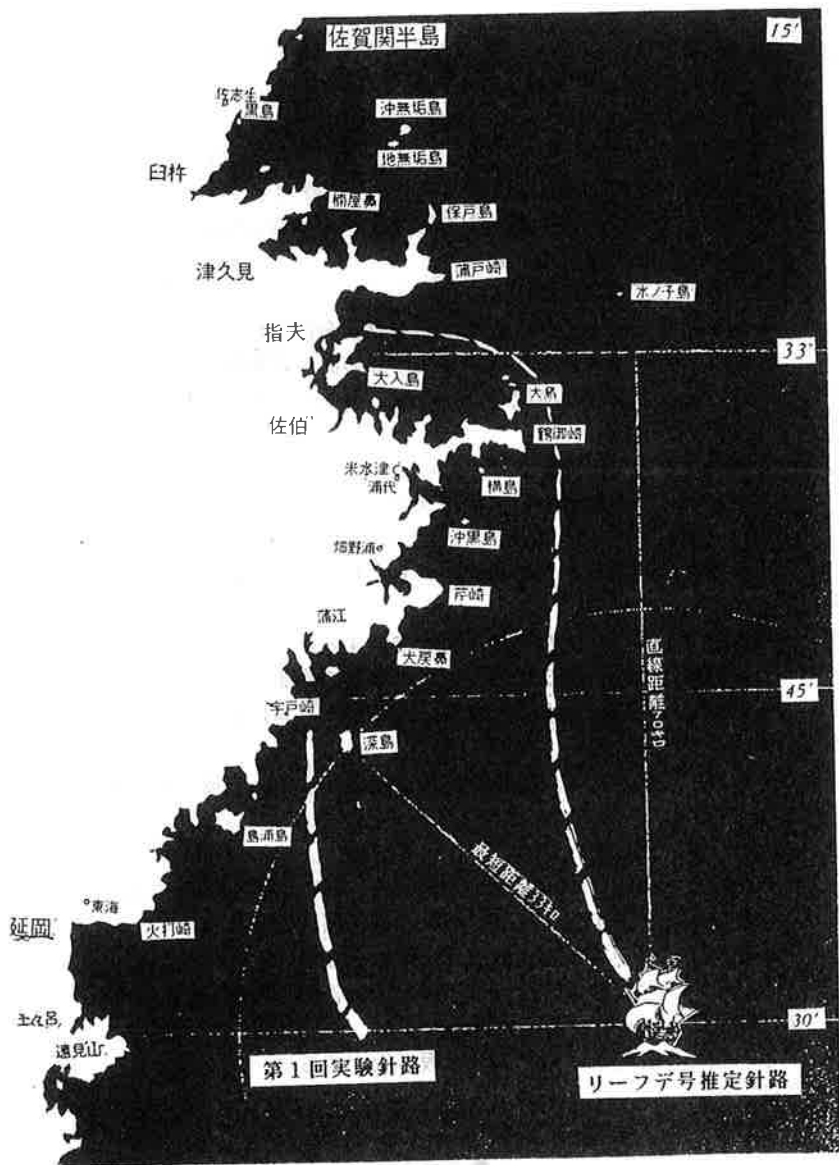
あすの潮(大船)
 高潮 15.4m 低潮 10.1m
 中々地 高潮 15.0m 低潮 9.7m
 香々地 高潮 14.6m 低潮 9.3m
 大分 高潮 14.2m 低潮 8.9m
 佐賀 高潮 13.8m 低潮 8.5m
 熊本 高潮 13.4m 低潮 8.1m
 鹿児島 高潮 13.0m 低潮 7.7m

各地の天気
 東京 晴時々曇
 神奈川 晴時々曇
 千葉 晴時々曇
 埼玉 晴時々曇
 大宮 晴時々曇
 浦和 晴時々曇
 蕨 晴時々曇
 北浦和 晴時々曇
 所沢 晴時々曇
 西武池袋線 晴時々曇

アミ戸
 が始まる。四月は八エヤの活動
 冷え、その後、今後は気温の上昇
 とともに、その数を増していく。これ
 に伴って、アミ戸は汗通、風通、雨
 用となるが、アミ戸は汗通、風通、雨
 の風なら半分、四時の風なら、上
 下い風なら半分、四時の風なら、上
 なアミ戸はあつり戻らない。アミ戸
 はきれいに洗って出したい。アミ戸
 (日本気象協会 天部)

(漂流・実験当日の天気図)





リーフデ号豊後漂着の経緯

1600年4月19日（セントマリア島から4ヶ月22日目ユリウス暦による。
慶長5年3月16日）

- ◆北緯32度30分に至って日本の陸影を発見。
- ◆生存者24名のうち歩けるもの6名。（あるいは5名）
（最短地は北西の蒲江深島まで約30^レ、陸地を目指すが既に日は没する。やむなく接岸をあきらめ北上、夜半鶴見半島、大島を過ぎ、明け方佐伯湾に入る。）

4月20日 辛うじて豊後に達する。

- ◆多数の小船漕ぎ寄せ甲板に上がり貨物を盗む。
- ◆豊後の地より1リーグ（約5^レ）沖の海上に錘を下ろす。
（大入島、西上浦の漁民が押し寄せ、唐船バエ近くの海上に錘を下ろした。）
- ◇シャチブイ（指夫・させぶ）の近くに駐在していた耶蘇会のパードレが臼杵城主太田一吉に後援を求む。
- ◇パードレ2人救援に向かうがオランダ船とわかり引き返す。
（長崎のポルトガル人に通知、さらに長崎奉行寺沢に通知。）

4月21日

- ◆太田一吉兵卒を遣わし積み荷を検査する。
（長崎奉行寺沢に通知する。さらに大阪の家康に通知。）
- ◆船員3人死亡。（水葬にする。上浦唐人バエに漂着）

4月24日頃（2、3日後）

- ◆臼杵に曳航される。船長、病員上陸滞する。（後に病員3名死亡する。）

4月27日頃（2、3日後、当地滞在5、6日後）

- ◆長崎より通訳のポルトガル人等来る。（オランダ船は海賊だと吹聴した。）
- ◇長崎奉行寺沢が来てオランダ人を捕え積み荷を没収した。
- ◆船員2名反逆して船内の商品売り払う。
（この時、船尾のエラスムス像が太田一吉の手に渡ったか？）

5月 3日頃（到着後9日目）

- ◆家康の使者到着、アダムス大阪へ出立する。

5月12日

- ◆大阪へ入り家康に拝謁する。
 - ◆アダムスが同朋、妻にあてた手紙より
 - ◇ディオゴ・デ・コウト「亜細亜誌」より
 - （ ）内は注釈又は推定